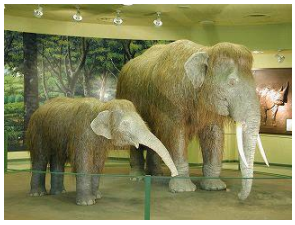
パオちゃん's EYE👀

2022年11月1日 発行　No.68

ナウマンゾウ

ナウマンゾウは絶滅したゾウの仲間で、その名前はドイツの地質学者ハインリッヒ・エドムント・ナウマンに由来しています。ナウマンゾウは日本には約３０万年前から約１万６０００年前まで生息し、その化石は各地で発見され、当時、日本列島全域に生息し、森林や草原で植物を食べて生きていたと考えられています。成長すると肩までの高さが２．５～３ｍほどになり、現在のアジアゾウと同じくらいの大きさで、アフリカゾウよりもやや小さかったようです。



当館１階エントランスホールの母子の動刻（左）と２階第１展示室のオスの全身骨格模型（右）

ナウマンゾウはもとは中国大陸に生息していましたが、氷期に海面が下がって日本列島と中国大陸が陸続きとなり、渡来してきたものと考えられています。その当時はサイ、スイギュウなども渡来したと考えられ、ナウマンゾウとともにそれらの動物の化石も発見されています。

当館２階の第１展示室にはこれらの脊椎動物の化石がたくさん展示されています。これらは瀬戸内海での底引き網漁で、偶然に網にかかって海底から引き上げられて採取されたもので、氷期に陸地だった現在の瀬戸内海の場所に生息していたものです。また、一緒にトウヨウゾウ（ステゴドン）という別の種類のゾウの化石も見つかっており、ナウマンゾウと区別は難しいですが、ナウマンゾウの臼歯（きゅうし）はすり合わせの面が比較的平ら（**下図①**）なのに対し、それよりやや古い時代に生きていたトウヨウゾウの臼歯はでこぼこしています（**下図②**）。トウヨウゾウも絶滅したゾウです。なお、ナウマンゾウとほぼ同時代に生きていたゾウであるマンモスはキバが長く、身に長い毛がびっしり生え、ナウマンゾウより寒い所にいました。臼歯のすり合わせの面は平らで、密なしま模様が見られます（**下図③**）。マンモスの化石は瀬戸内海からは発見されていません。

ナウマンゾウの臼歯①、トウヨウゾウの臼歯②、マンモスの臼歯③

武智泰史（地学担当）

パオちゃんズアイ👀に関するお問い合わせは
倉敷市立自然史博物館
〒710-0046　岡山県倉敷市中央２－６－１
電話:(086)425-6037　FAX:(086)425-6038
E-mail:musnat@city.kurashiki.okayama.jp

博物館ホームページには
いろんな情報がいっぱい♪
『倉敷市立自然史博物館』で
検索してみよう！　パオより